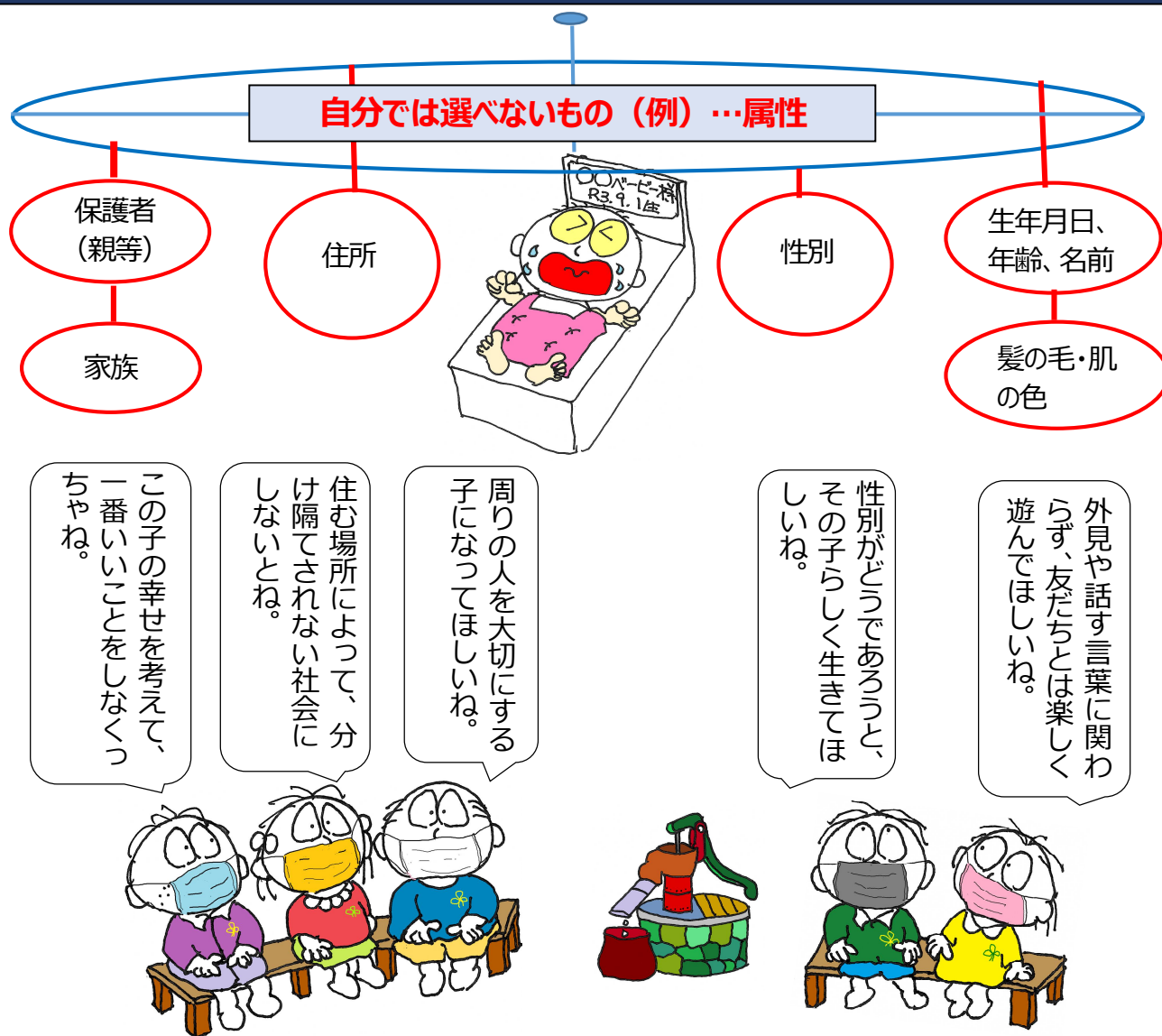


人権課題につながる 「偏見」について考える

私たちはこの世に誕生すると、まず生年月日と性別が決められます。そして、名前をつけられ、保護者（親等）・家族、住所などが選ぶことなく自分に付いてきます。また、髪の毛や肌の色等、親から頂きます。これらの事柄を属性とよび、本人には責任が及ばない事柄になります。今ある人権課題とは密接に関連します（下図）。

そこで今回は、この属性によって分け隔てされ、差別につながる「偏見」について考えてみましょう。

次のイラストは、井戸端会議のようすです。誕生した赤ちゃんの話題になっています。
人権課題と属性を関連付けてみましょう。



「偏見」について考えてみましょう。

「偏見」とは、偏ったものの見方や考え方です。つまり、確かめしないで自分勝手にイメージを先行させてしまったものです。



「偏見」ってどのようにして起こるの？



私たちは、物や人を認識するとき、たがいに似ているものを集めて分類（カテゴリー分け）します。分類することで、効率よく情報を処理します。たとえば「子ども」「女性」「高齢者」というふうだね。このとき、分類に属する人たちの個人差は無視され、分類全体に共通した特徴で大まかに判断します。たとえば「女性の方が家事や育児に向いている」といったことです。これを固定観念（ステレオタイプ）とよびます。この固定観念に「嫌い」「不安」「敵意」「軽蔑」といった感情が加わると偏見になります。これが差別につながります。

不利益な扱いや排除

偏見（見方・考え方）⇒ 差別（言動）



「偏見」はあくまでも見方や考え方で、「差別」は言動です。「女性は、家事や育児に向いている。だから町内の相談事からは、女性を外そう。」という差別になります。偏見は特定の集団や人々に対する不利益な扱いや排除といった行動と結びつきやすいです。



それでは、この「偏見」をなくすにはどうしたらよいですか？



「偏見」をなくすことは容易ではありません。なくす方法としては、

- 相手と自分を置き換えて頭の中で想像してみる。
 - 客観的に自分の言動を振り返ってみる。
 - 相手との対話を通して相手の事情を知り、認める。
- などがあるかな。そうすれば、きっと「偏見」もやわらぐのではないかな。

相手を「子ども」とか「男性／女性」などのくくりで分け、さらに蔑視の感情が入ると偏見になります。そして、これが相手に不利益な扱いや排除につながれば差別になります。

お互いの個性や多様性を尊重し合って、偏見や差別をなくしていきましょう。

参考文献 「あなたにもある無意識の偏見 アンコンシャス バイアス」北村英哉著 河出書房新社 2021

